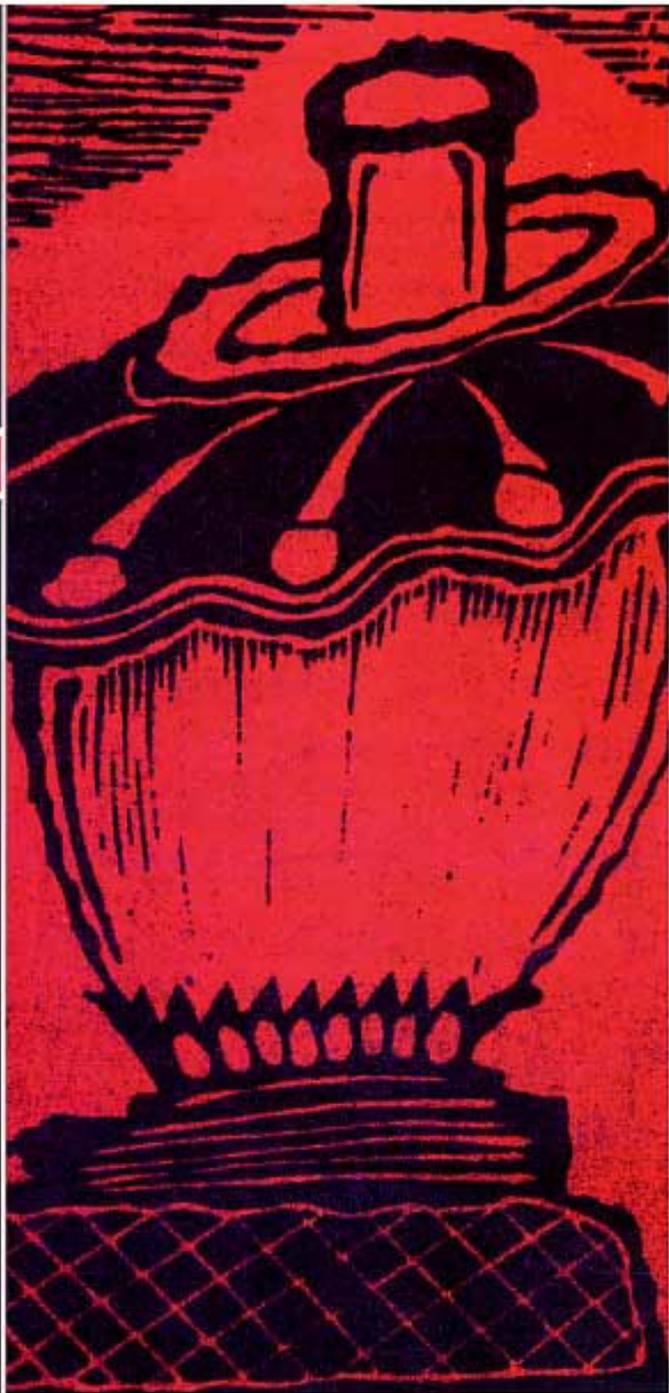


春燈

12
月号

DECEMBER 2007



安住 教の句

草ひばり悲流離悲流離と鳴きつるよ

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

彼のながいながい橋のある蒲郡勉強会の折の御句。悲流離と漢字で詠まれたところに草ひばりへの思い入れが深い。句友が今朝畑に居たのを捕えて来たと言つて先生に差し上げたのである。私達の前では鳴かなかつたのが、先生の前では見事に鳴いて見せたのである。もうあれから二十八年!! 月日のたつのは早い。

成田なな女

安住 敦の句

冬ざくらしづかにいまは兵ならず

句集『古暦』昭和二十九年

昭和二十年七月三十八歳の老兵の身で応召された安住は翌月十五日の敗戦により九月に復員した。その年の冬の作とある。戦後のインフレと物不足で生活は大変な時期だが、念願の新俳誌発行が久保田万太郎を主宰に実現の運びに到りつつあったときである。身辺多忙を極めていても、もう生命の心配はなく仕事に打込めるのだ。その安堵感と喜びが滲み出てくるような一句である。

伊 東 湘 三

西ヶ原日記

(37)

鈴木榮子

両国てふ房総めきし駅の秋
帰燕仰ぐ横長高低一眷族
伸び易き苦髪そのまま風邪カルテ
風邪引きて強気の鼻をへし折らる
風邪声を悟れまいと受話器置く

この月の歳時の中のべつたら市
あの日職場の食堂で聴く憂国忌
細編長編母の指先毛糸編む
身を離る一羽や二羽やはぐれ雁
寒柝の遠のく芝居心地にて
歳晩の小走り癖の運動靴
年逝かす稿債ひとつひとつ返し

晩年

さのれいこ

四捨五入すれば八十路や桐一葉
おのづから席のきまりて牡丹鍋
線刻の地藏菩薩や曼珠沙華
戒名のなじめぬ位牌鳥渡る
紙縫つくるうしろ姿の父の冬
夜干してしめりの残る足袋二足
話しても分からぬ猫や秋の風
冬の蠅いつまで生くるつもりかな
足もとに死神すわる蒲団かな
晩年の空のあかるさ雪蛭

嶺の光

武田巨子

引越の荷を待つ門や実むらさき
草雲雀鳴きつぐ終の住処かな
立ち止まり立ちどまりして秋の礎
カザルスの小鳥も交じる児童館
子育ての頃のはるかや木の実降る
リフォームの真白き壁に冬立てり
時雨虹ふたたび立ちし窯場かな
ビオラ抱へ子らの来たりし聖夜かな
捨てきれぬものを捨てずに年逝かす
初雪の消えし鈴鹿の嶺光る

当月集

鈴木 榮子選



○ 佐々木 新

破れやれの峠の石神秋の蝶しゃくじ

秋蝶や賤のをだまき静の舞

みはるかす猿楽台地そばの花

廃校の吊輪肋木色鳥来

六本木ヒルズに釣瓶落しの日

○ 横田 初美

天よりの調べのごとし秋風鈴

露けしや厨にこもる器具の音

使ひ合ふループを拭ひ秋灯下

望月夜あといくたびを賜はるや（誕生日）

柿熟るるあまたの雲を見送りて

○ 内野 俊子

意地張つてみても二人の良夜かな

籠城の推敲句敲き虫時雨

どの音も空へ抜けゆく秋の水

天高し米櫃の米減りにけり

とつぷりとひとりの世界林檎むく

○ 島田 山流

桃の果の埋み尽せり甲斐の山

威儀止し三方飾る衣被

秋あはれ蘇我氏の栄枯石舞台

曼殊沙華時季も所も違へざり

熊除けの鈴響かせり柿の里

○ 馬場 宏一

帰りたきあの日のことや秋ゆふべ

清秋や耳福眼福フェルメール

すがりつく負け老犬や身にしてみて

秋鯖の乗り具合よき脂かな

どこまでも柵田を燃やす曼珠沙華

春燈の句

鈴木 榮子選

落鮎に添へて一筆釣自慢

女郎花売れ残りしが花舗の隅

秋の鮎釣り寄せられて光りけり

最終便待つバス停や鉦叩

忽然と一本立ちの曼珠沙華

残照に白曼珠沙華異端児か

この世にも姥捨山あり曼珠沙華

朝まだき鳶の一と声さやけしや

御会式の出店の地割ひもすがら

日蓮忌案内を馱の西ひがし

秋天や五重塔も会式待つ

間に合つてほつとすること草の花

秋天の下の南京玉簾

兵庫 伊藤 百江

京都 加藤 禮子

東京 山川 好美

茨城 君塚敦二

自由訳般若心経天高し

秋の雨敦句集をボケツトに

賢治の詩詠んで一献今年酒

朝顔や宮澤賢治産湯の井

北前船栄えし北上川きたかみ鳥渡る

北上川きたかみを大きくまたぐ鯛雲

般若苑跡かたもなし夕芒

引く波へ小石の挽歌秋の浦

深秋や谷崎源氏の挿絵繰る

秋寂や明の山水呉須茶碗

一湾の夕空焦がす鯛雲

たつぷりと北の匂ひの練焼く

菜園の秋生りさぐる種屋かな

一ト日づつ朱色増しゆく鶏頭花

千葉 小田切明義

千葉 荻原美保子

千葉 川瀬 千恵



余言

鈴木 榮子

の私達と亡くなった「ちちはは」はいつも一緒だと思っ
ている家族もいる。私は右肩の後にいつも母がいて、よい事
があれば「有難う」といい、失敗すれば「今度気を付ける
から」と言う。今だにあの世とやらにいたとは思えない。
お墓はわが家の庭にあつてもよいのだと思っている。
現実には小平霊園であるが。

秋天を衝く江戸の銀杏の気概かな

久本久美子

銀杏は東京都の「木」である。まことに東京を代表して男々
しさと気概のある木である。

方々にあるが銀杏が似合うのは東大前の本郷通りである。
落葉高木として落葉ときには「い・て・ふ」と舞っている
と高名な方の句に読まれている。真砂女先生の「卯波」の
献立にこの時季ぎんなんが載っている。

ちちははの逢瀬も果てし霊送り

上野 進

「千の風にのつて」という歌が流行っている。あの歌詞は
その通りで更めて伝えたいなら歌われるがよい。

それはそれとしてこの作者のように盆は、ちち、ははと
の逢瀬だと待つ方もある。

盆はちちははを特に招待する日だと思ふのもよい。現世

自愛や切ながき捷毛の彼岸花

植竹 惇江

しろがねの三陸秋刀届きけり

栗田 忠男

秋光や水直角に日比谷濠

宮田 豊子

(以下略)

